

主 題：キリストを中心とする働き①

聖書箇所：コロサイ人への手紙 1章24節

テーマ：私たちが見做すべき働きにおけるパウロの態度とは？

今朝一緒に学んでいきたいみことばは、コロサイ人への手紙1：24-29です。このコロサイ人の手紙を見始めてから早5カ月がたちました。そしてようやく私たちは1章の終わりを迎えようとしています。まだまだ先は長い道のりになりそうですが、最初に、この新たな1年は私たちの愛するイエス・キリストの偉大さを知る旅に出ますと言いました。みことばを通して、主の偉大さというものをますます目にすることができているのでしょうか？キリストのすばらしさを知って歩いていくことの喜びや感謝がそれぞれのうちに与えられているのでしょうか？また何よりキリストだけが自分にとって十分な存在なのだという確信は増し加わっているのでしょうか？まだまだ旅は続いていきます。続けてどんなものよりもすぐれている主の偉大さを自分のこととして一緒に考えていきましょう。初めにも触れたように、きょうは1章の最後の部分を24節から考えてみたいと思います。具体的な内容に入る前にみことばをお読みします。

コロサイ1：24-29

「24 ですから、私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。そして、キリストのからだのために、私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです。キリストのからだとは、教会のことです。25 私は、あなたがたのために神からゆだねられた務めに従って、教会に仕える者となりました。神のことばを余すところなく伝えるためです。26 これは、多くの世代にわたって隠されていて、いま神の聖徒たちに現された奥義なのです。27 神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあってどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。28 私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。29 このために、私もまた、自分のうちに力強く働くキリストの力によって、労苦しながら奮闘しています。」

どんな時代であろうとも、福音の働きを妨げようとする力は、変わらずに存在しています。かつて17世紀に活躍したイギリスの説教者ジョン・バニヤンも、その戦いを経験した人物のひとりでした。何千人もの人々に聖書の真理を忠実に説いていたバニヤンでしたけれども、当時の英国国教会の教義に逆らったとして逮捕され、牢屋に入れられることとなります。そしてその際、彼は判事からある判決を下されました。その判決とは「これ以上、神様のことばを説教しないということに合意さえすれば、釈放する」というものでした。ただみことばを語らないと約束することが求められたのです。それを聞いた彼は、「もし今日解放されるなら、神様の助けによって、私はまた明日説教をする。」と答えていました。こうしてみことばを語ることをいっさい妥協しなかったバニヤンはそれから約12年もの間、牢屋で過ごすことになりました。福音を語らない、その選択をすれば釈放でした。でもそれを拒んで、彼は主のために生き続けていたのです。福音の働きを妨げようとする者たちの手によって、彼は長い間苦しみを味わうことになりました。だれ目で見ても、福音の前進に歯止めがかかってしまったかのように思える出来事でした。バニヤン自身も神様のことを責めて、置かれている状況に対して不安や失意を覚えていたとしても、何らおかしくはなかったでしょう。しかし、神様の働きはそこで終わることはありませんでした。どんな状況であろうとも主への信頼を失うことのなかったバニヤンは、牢獄生活にあって、ある書物を記しました。その書物とは、「天路歷程」と言われるもので、この本はこの時代から今もお変わらずに人々に愛されて、多くの者たちを主のもとへと導くために用いられてきました。私たちの目には不可能に思えるような状況でした。でも、神様には不可能なことはありません。キリストの福音

が妨げられることは決してなかったのです。どんな敵も、どんな状況も、福音の働きを止めることはできませんでした。

そしてもちろんパウロは、ほかのだれよりもこの真理をわかっていました。だからこそ、彼はどんな状況に置かれたとしても福音を語り続けていたのです。「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかやりなさい。」(Ⅱテモ 4:2)と自分自身が口にしたパウロは、主のためにいつも働き続けていました。ですから、バニヤンにしろ、パウロにしろ、主に仕えている働き人として、最後の最後までその生涯を走り切りました。主に仕える者として、その責任を全うしたのです。そしてこの責任は、今を生きる私たちにも同じように与えられています。救われた私たちは、主のためにすべてをささげて生きていくということ、主に仕えて主の栄光のために働いていくことが求められています。

○キリストを中心とする働き：模範とするべき五つの態度

そうやって私たちは、主に仕える者として生きていくのですが、それは具体的にどんな歩みをしていくことを求められているのでしょうか？皆さんがだれかに「主に喜ばれる働きとはどんな姿なのですか」と問われれば、何と答えるでしょうか？感謝なこと、私たちがきょう見ていくこの1:24-29を見れば、いつもキリストを中心としたパウロの働きを、その模範として見て取ることができます。私たちが24-29節を見ると、キリストのために仕え続けたパウロが、いったいどんなふうに神様と人々とに仕えようとして続けていたのか、その例を見ることができるのです。24節は、23節の最後のところにあった「この福音は、天の下のすべての造られたものに宣べ伝えられているのであって、このパウロはそれに仕える者となったのです。」ということばの続きでした。福音に仕える者になったパウロが、いったいどのように歩んでいたのかが24-29節に記されています。ここに私たちは、私たちが模範とするべき五つの態度を見て取ることができるのです。

彼の模範からぜひ一つ一つ順番に大切なことを学んでいきましょう。私たちが目指していくべき目標を改めてよく考えてみましょう。私たちが目指していきたいと思ったとしても、目指していくべきゴールを知らなければ、どこにもたどり着きません。私たちの愛するパウロが、その働きがどんなものなのかを私たちに示してくれていました。ですから、そのことをともに考えていきましょう。それを通して、私たちひとりひとりが愛する主に喜ばれる働き人として、仕える者となっていくことを心から祈っています。

1. 働きに伴う結果を喜んで受け入れること 24節

では、早速一つ目の態度を見てみましょう。パウロの働きに見て取れる一つ目の態度は、働きに伴う結果を喜んで受け入れるということです。もう一度24節を見てください。「ですから、私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。」と始まっていました。余りにも簡潔に書かれているからこそ、さっと読み飛ばしてしまうかもしれません。でもよく考えてみてください。彼は喜んでいたので、ここで用いられている「喜び」ということばには、もともと「幸福な状態を楽しむ」とか、「うれしさや喜びにあふれている」といった意味が含まれています。要するにパウロは心から喜んでいました。実際のところ、何もうれしくないのに外側だけ喜んでふりをしていたのではありません。無理やり感謝をしていたのでもありません。パウロは確かに幸福やうれしさに満たされた状態にあったのです。彼のうちには喜びがあふれていました。

でもここで注目してほしいのは、そんな喜びにあふれていたパウロがいったい何を喜んでいたのであるということです。24節に、「私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています」とあります。パウロはコロサイの兄弟姉妹のために受ける苦しみを喜びとしていました。彼は苦しみを味わってなお、その心に喜びがあふれていると言うのです。これを聞いて不思議に思う人がいるかもしれません。苦しみの中で喜びを見出すというのは、おかしいとさえ思う人もいるかもしれません。私たちは、喜びと苦しみは相容れないものだと思っています。これら二つのものが同時に成り立つ状態などあり得ないと考えているのです。でもパウロにとってはそうではありませんでした。いや、もっと言えば、聖書も信仰者の歩みにおいて、苦しみと喜びが切り離せない関係にあることを、何度も繰り返し教えているのです。たとえ困難で厳しい状況にあったとしても、信仰者はその中で喜びを見出して、喜びをもってそれに応答することができると言われてしています。

例えば、パウロ自身も別の箇所でこう述べていました。ローマ5：1-3に、「：1 ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。：2 またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいますが。：3 そればかりではなく、患難さえも喜んでいますが。」と記されています。また、パウロだけではなく、ペテロもこう口にしていました。I ペテロ4：13に「むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。」と書いています。またヤコブもヤコブ1：2-4で「：2 私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。：3 信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。：4 その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」と兄弟たちに求めていました。たとえ艱難の中であろうと、キリストのための苦しみであろうと、さまざまな試練であろうと、主によって救われた者たちはみなそれらに対して喜ぶことができると何度も何度も記されていました。

そしてまさにパウロはそのようにして歩んでいました。言うまでもないかもしれませんが、彼ほど数え切れないほどの苦しみに遭っていた人物はいなかったのです。思い返してみてください。このコロサイの手紙を記したときも、彼はローマの獄中であつたのです。どう考えたとしても、彼にとってそれは好ましい状況ではありませんでした。キリストの福音を宣べ伝えたいと何よりも願っている彼が、捕らえられ、鎖につながれていました。思うままに人々のところには出て行けなかったのです。彼の働きは制限されていました。ましてや自分のいのちまでもがこの先どうなるのか不透明でした。パウロはその中でも喜んでいました。悲しみや失望をもたらすような場面に出くわしていなかったから喜ぶことができたのではありません。すべてのことが自分の思いのままにうまくいっていたから、彼は賛美にあふれていたのではありません。苦難の真ただ中であつてなお、彼はそこに幸いを、満足を見出すことができました。ですから、確実に言えることは、間違いなく彼の喜びというのは、周りの環境や周りの状況に左右されるようなものに基づくものではなかったということです。

だとすれば、パウロの喜びはいったいどこから来たのでしょうか？だれも喜ぶことのできないような状態の中にあつて、どうして彼は喜ぶことができたのでしょうか？もちろんこの喜びというのは、彼自身のうちから自然に生まれてきたものではありませんでした。この喜びというのは、神様が救われた者に与えてくださるものだったのです。主にあつて、それぞれのうちに働いてくださる聖霊なる神様が生み出してくれるもの、まさにあのガラテヤ5章にも言われている御霊の実の一つでした。ガラテヤ5：22-23にこんなふうにかかれてあります。「：22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、：23 柔和、自制です。」と。神様が与えてくださる御霊の実、「喜び」でした。だからこそ、主にある者たちは、いろいろな困難を経験したとしても、その中であつてどんなときも主に拠り頼みながら、主のうちにあつて喜びを見出すことができるのです。主にあつて喜びを持って日々を歩いていくことができるのです。パウロもそのようにして歩んでいました。パウロの喜びの源は、神様にあつたのです。それに加えてパウロが喜びを見出すことができた理由はほかにもありました。パウロは苦しみというものがただ苦しみで終わるのではなく、苦しみを通してすばらしい結果をもたらされることを知っていたからでした。キリストのために受けているその苦しみの、確かにそのときは難しさを覚えることがあつたとしても、最後にはすばらしい結果をもたらすことになることと確信していたからこそ、パウロは今の苦しみを喜ぶことができました。先を見て、今を喜ぶことができたのです。

でも、これだけだと意味がわからないかもしれません。ですから、パウロの人生を振り返ってみましょう。パウロの人生を一言で表すと、苦しみの連続でした。キリストの福音を宣べ伝える働き人として、あかし人として生きていた彼の歩みには、文字どおり数多くの困難や試練が存在していました。でもそのさまざまな苦しみは、偶然のものではありませんでした。それらの苦しみの、福音を前進させるための神様のご計画でした。彼が味わったさまざまな難しさは、福音を前進させるための神様の手段だったのです。例えば私たちがキリストの福音を広げていきましようとなつたときに、キリストの福音を広げるための手段として苦しみを選びますか？多分だれも苦しみをその手段にしようとはしないでしょう。でも、神様の測り知れない知恵は全然違いました。神様はパウロに降りかかってくるいろいろな迫害さえも用いて、ご自身のみことばを人々の間で広めようとされていたのです。

そのことは、使徒の働きを見れば非常にわかりやすく書かれています。この時間にすべての箇所を見ることはできませんので、一つだけ一緒に見てみましょう。使徒13章に迫害や困難を通して福音が広がっていく様子を見て取ることができます。使徒13：49からこう書いています。「：49 こうして、主のみことばは、この地方全体に広まった。：50 ところが、ユダヤ人たちは、神を敬う貴婦人たちや町の有力者たちを扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、ふたりをその地方から追い出した。：51 ふたりは、彼らに対して足のちりを払い落として、イコニオムへ行った。：52 弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。」、彼らは迫害を受けても喜んでいました。その後、14：1からこう続いていきます。「：1 イコニオムでも、ふたりは連れ立ってユダヤ人の会堂に入り、話をすると、ユダヤ人もギリシヤ人も大ぜいの人々が信仰に入った。：2 しかし、信じようとしないうダヤ人たちは、異邦人たちをそそのかして、兄弟たちに対し悪意を抱かせた。：3 それでも、ふたりは長らく滞りし、主によって大胆に語った。主は、彼らの手にしるしと不思議なわざを行わせ、御恵みのことばの証明をされた。：4 ところが、町の人々は二派に分かれ、ある者はユダヤ人の側につき、ある者は使徒たちの側についた。：5 異邦人とユダヤ人が彼らの指導者たちといっしょになって、使徒たちをはずかしめて、石打ちにしようとして企てたとき、：6 ふたりはそれを知って、ルカオニヤの町であるルステラとデルベ、およびその付近の地方に難を避け、：7 そこで福音の宣教を続けた。」、そして少し飛んで14：19-22にも「：19 ところが、アンテオケとイコニオムからユダヤ人たちが来て、群衆を抱き込み、パウロを石打ちにし、死んだものと思って、町の外に引きずり出した。：20 しかし、弟子たちがパウロを取り囲んでいると、彼は立ち上がって町に入って行った。その翌日、彼はバルナバとともにデルベに向かった。：21 彼らはその町で福音を宣べ、多くの人を弟子としてから、ルステラとイコニオムとアンテオケとに引き返して、：22 弟子たちの心を強め、この信仰にしっかりとどまるように勧め、「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならない」と言った。」とありました。私たちはそこにあるパターンを見ることができます。確かにパウロは数多くの苦しみを味わい続けていました。福音を大胆に語っている彼のことを憎む者たちによって、迫害され、石打にされて殺されかけたこともありました。だから彼は別の町へと移って行ったのです。でも、そこで彼は福音を語り続けていました。そのように、死にかけてなお彼はキリストの働きのためにありとあらゆる苦難を耐え忍んでいたのです。また、その町で迫害に遭ったときに、彼は別のところに行きました。そしてそこで福音を語り続けていたのです。神様はそういったものさえ用いられていました。パウロはそうやっていろいろな難しさの中で、主にあって耐え忍んでいたのです。

でも、彼は同時に自分自身が苦しみを受けている理由というものもよくわかっていました。自分の受ける苦しみが、ただ苦しみに終わるのではなく、よりすばらしい結果を、みことばの広まりをもたらすことをわかっていました。実際、パウロの働きを通して救われたエパfrasによって、今見ているコロサイの教会も誕生したのです。パウロは目先の苦しみではなく、神様が成し遂げられる、その先にある福音の前進に目を留めていました。だからこそ彼はそんな主の働きを自分自身が担えることを感謝して、たとえ困難の中にあつたとしても、神様にあつてあふれんばかりに喜びを見出すことができたのです。だからこそ、彼は難しさの中にあつても喜んでいました。目先のものではなく、先に起こる神様の働きを確信して歩み続けていたのです。

そして、そんな態度は、私たちにとってももちろん大切です。果たして私たちが主のために働いていこうとするときに、その態度はいつも喜びにあふれたものでしょうか？どんな働きでも構いません。主のためになそうとするときに、私たちの持っている態度は喜びでしょうか？それともいやいやながら、何かしらの義務感でなしているのでしょうか？また、キリストの福音のために働いていくときに、難しさを覚える場面は多々出てくるでしょう。みことばを語って拒まれてしまうこともあるかもしれませんし、それによって関係がねじれてしまうこともあるかもしれません。そういったことがあつたときに、私たちはすぐにあきらめてしまうのでしょうか？困難に直面したら、すぐに失意や不安に満ちてしまうのでしょうか？それとも神様の福音を前進させるその力を信じて、たとえ難しさの中にあつたとしても変わらずに喜んでいられるのでしょうか？主のうちにあって、喜びを見出し続けているのでしょうか？すべての主権者であられる神様は、私たちには想像もできないような手段を用いて、ご自身の計画を成し遂げられるということを、私たちはいつも覚えていることができます。だれが迫害や困難を用いて、良い知らせを伝えようなどと考えるでしょう？神様の知恵は、私たちには測り知れないものでした。私たちはいつもそんな私たちの想像にはるかにまさる偉大な神様にあつて、どんな状況にあつたとしても喜びや満足を

見出すことができます。この方において私たちは力を見出すことができます。でももしこの神様を見上げるのをやめるのであれば、喜びの源である方にとどまることをやめるのであれば、周りを取り巻いているいろいろな苦難によって、容易に揺るがされてしまうでしょう。だからこそ、揺るがない方に目を留め続けることです。喜びの源である方にこそ、私たちはいつも変わらないあふれる喜びを見出すことができます。パウロはそのように歩んでいました。私たちもそのように歩めるといことです。

◎キリストの苦しみの欠けたところ

でも、それだけがパウロが24節で教えていたことではありませんでした。24節後半部分に「そして、キリストのからだのために、私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです。キリストのからだとは、教会のことです。」と書かれていました。さて、この箇所は非常に興味深いものでした。パウロは「私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです」と言っています。パウロはいったい何を言わんとしていたのでしょうか？まるでキリストの苦しみには何かしら欠けている部分があるかのような、どこか十分でない足りない部分があるかのような感じに聞こえるかもしれません。また実際のところ、この箇所はコロサイの中だけではなく、聖書全体の中でも理解するのが難しい箇所の一つとして扱われています。この「私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです」ということばに関して、幾つかの本が架かっているくらい難解なところになるのです。私自身もまだ完全にこれという答えにたどり着いてはおりません。ただ、これがそうではないかというものがあるので、そのことを皆さんに少し分かち合いたいと思います。大きく分けて三つの考え方があります。その三つのうちで、皆さん自身もどれがいいのかを考えてみてください。

1) “キリストの贖い”

まず、一つ目に考えられていることは、キリストの贖いに関連する考え方です。どういうことかと言うと、ある人たちは「苦しみの欠けたところ」というこのことばを、イエス様が十字架で受けた贖いのための苦しみが十分ではなかったと考えています。罪を赦す救いのみわざが十分なものではありませんでした、欠けていましたと。だから、私たちも自分たちの行いでもってパウロのように足りない部分を補わなければいけないのですと教えています。

キリストの十字架の贖いのみわざは足りませんでしたという考え方は、言うまでもなく完全に間違っていました。これまでの流れを考えてみても、パウロはコロサイの中で、キリストの充分性に関して繰り返し語り続けていました。コロサイの教会の中に入り込んで来たにせ教師たちは、イエス・キリストは救いにおいても、歩みにおいても十分ではありませんと言うのです。だからパウロは、いやいや、この世界のすべてを造られ、支配されている御子が、すべてにおいて一番なのだずっと繰り返し教えていました。そして何よりも先週私たちが学んだ同じ1:21-23のところで、キリストの死が、キリストの十字架でのみわざのみが和解を成し遂げるために十分なものであったのだと、パウロは明白に教えていました。ですから、私たちの行いで何かしら補うことができるものはなかったのです。ただ、キリストのゆえに、救いのみわざはすべて成し遂げられました。イエス様が十字架の上で叫んでいたのです、「完了した。」と。だからこそ何かを付け加えることも、何かを減らすことも到底できませんでした。かつて敵として歩んでいた私たちはみなこの御子のからだにおいて、その死によって神様と和解させられました。それが私たちの持っている希望だったのです。ですから、一つ目の考え方は容易にノーと言えます。キリストの欠けたところを満たしているというこの話は、贖いに関連したものではありませんでした。

2) “救世主に関する苦悩”

次に二つ目の考え方としてあるのが、救世主に関する苦悩に関連した考え方です。これだけ聞いても意味がわからないと思いますけれども、ある人たちは、キリストが将来地上に戻って来られるその最後の日までに、すでに定められている一定の苦しみが満たされる必要があると考えています。でもこれだけ聞いてもわかり辛いと思うので、その様子がわかり易く描かれている黙示録の一つの箇所を見てみましょう。黙示録6:10-11にこんなふうに書いています。「:10 彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」と。御座を囲んでいた殉教した多くの者たちと主のやり取りがなされています。その後で11節に「すると、彼らのひとりひとりに白い衣が与えられた。そして彼らは、「あなたがたと同じしもべ、また兄弟たちで、あなたがたと同

じように殺されるはずの人々の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいなさい」と言い渡された。」とありました。主が決めておられる迫害を受け、苦しみを受ける者の数にはまだ達していないということです。今もまだ満ちていません。主は今も変わらずに、忍耐をもって、あわれみ深くその日を待っておられます。でも必ずいつの日か、その数が満ちる時に、ご自身の義に基づいてすべてを正しくさばいて、復讐をするために帰って来られる。そんな最後の日はやって来るのです。ですから、そのようにしてもう定められているその基準、その数。そういった将来のものとパウロは自分のことを結びつけて、キリストの苦しみの欠けたところを、今私は満たしているのだといった考え方もあるのです。今、簡潔に言いましたけれども、さらにいろいろなことを深めて考えていくことももちろんできます。1冊の本になっていることを今ここで全部は言えませんが、ただ、この考え方の中にも正しいと思える部分はたくさんあります。実際に多くの信頼できる先生たちもこの立場をとっておられます。ですから、皆さんがこれを正しいと思うのであれば、それでも別に構いません。

3) “キリストと一つとされたことがもたらす苦しみ”

でも、個人的には三つ目のものがここにはふさわしいのではないかと、現時点では考えています。三つ目の考え方というのは、キリストと一つとされたことがもたらす苦しみに関連しているというものです。これを理解する上で鍵となる箇所があります。このコロサイのこぼれ話を記したパウロの回心が記されている使徒9章に、おもしろいつながりを見て取ることができます。救われる以前のパウロはどんな人物だったかを思い出してみてください。パウロは余りにも熱心に、クリスチャンたちを迫害していました。男性も女性も関係なく、家から引きずり出しては牢に入れていたのです。そんなパウロのことをダマスコの道中で止めたのは、主ご自身でした。天からの光で彼のことを照らし、そして彼に向かって語ったのです。その時にパウロが耳にしたこぼれ話を覚えていますか？イエス様はパウロに「サウロ、サウロ。なぜ私の教会を迫害するのか」と言っていました。「サウロ、サウロ。なぜ兄弟姉妹たちを迫害するのか」と言っていました？そうは言っていませんでした。イエス様ははっきりと、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」（使徒9：4）と言っていたのです。

パウロはイエス様ご自身のことを直接は迫害していませんでした。彼はクリスチャンたちのことを迫害していたのです。イエス・キリストを主と告白している者たちを次々牢屋に入れていたのであって、キリスト本人に対して、直接危害を与えていたのではなかったのです。でもイエス様は「なぜわたしを迫害するのか」と問うていました。いったいなぜイエス様はそういうふうに関わられたのでしょうか？それはキリストとキリストのうちにある者とは、一つに結びついたもの、もうすでに一つとされたもの、一致しているものだからでした。もうすでにキリストのからだに属するものになっているからこそ、かしらとからだ結びついているからこそ、からだであるキリストのうちにある者を迫害することは、かしらであるイエス・キリストを迫害することと同じだったのです。主と主のものとしてされた者たちの間には、切っても切り離せないつながりがありました。そして、このキリストと一つとされたのだということが、ここでキリストの欠けたところを満ちそうとしていたという、パウロの言わんとしていたことに大きく関連していました。

いろいろなことが言えますけれども、簡潔に言えばこういうことです。主を憎んでいるこの世の者たちというのは、みんな昔も今も変わらずにキリストのことを迫害しようとします。でも、実際にはもうこのキリストは今、目に見える形でこの世にはいないのです。天に上られた方に対して、直接の危害を加えることはできません。だからこそキリストのことを今もなお変わらずに憎んでいる者たちは、いないキリストの代わりに、キリストの弟子たちを迫害しようとするのです。本来であれば、キリストに向けられる人々のあふれんばかりの敵意や憎しみや拒絶、そういった苦しみをキリストではなく、キリストの弟子となった者たちが代わりに受けるのです。パウロもそれを受けていました。コロサイの人々のために、いや教会のために、彼はそれを受けていたのです。パウロはその意味でキリストの苦しみの欠けた部分を満ちしていると言うのです。パウロはそうやって、ほかの兄弟姉妹の、同じからだの一つとされた者たちの苦しみを受けていました。

パウロが回心したときに、イエス様もパウロに関してこんなふう述べていました。使徒9：15-16に、「：15 ……あの人わたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。：16 彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」

と。そして、そのことばのとおり、パウロは初めの初めから苦難にあふれた生活を歩むことになりました。主の御名のために多くの葛藤や苦しみを味わい続けたのです。キリストのゆえに受ける迫害や苦難で日々あふれ返っていました。彼が受けた試練や苦しみを、私たちは聖書の中で見て取ることができます。その苦しみの一部をⅡコリント11：23-28にこう記していました。「：23 彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。：24 ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、：25 むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。：26 幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、：27 勞し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。：28 このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。」と。これを読んだだけでも、ここにいる私たちはだれも経験したことの無いような、想像することもできないような苦しみ、苦痛を、彼はキリストのために受けていました。しかも驚くべきことに、これが彼が受けたすべての苦しみではなかったということです。彼は愛する主と一つとされて、愛する主のために働くこと、そしてその働きの中で受ける苦しみを喜ぶことができました。キリストに仕えて、キリストのためにすべてを犠牲にして生きていくことが、そしてそれを通して福音が前進していくことが、彼にとっての喜びだったのです。

では私たちはどうでしょう——。私たちの社会は苦しむこと、苦痛といったものよりも快適さを大事にして、それを追い求めています。もちろん快適さ自体が悪いわけではありません。でも悲しいことに、私たちは余りにも快適さに慣れ親しんでしまった余り、教会の中においても、またキリストのための働きにおいても、できる限り苦しみを避けようとする場合があります。そんな私たちに対して、主を憎んでいるこの世の中であって、キリストに忠実であろうとするのであれば、主のために味わう苦しみを喜んで受け入れる態度を持っていなければいけないとパウロは教えてくれていました。イエス様もヨハネ15：20で「しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。」とはっきりと言っていました。イエス様は人々によって迫害されました。つまり、私たちも迫害を受けるということです。みことばは、それが待っているとはっきりと言っていました。にもかかわらず、私たちは迫害をどうにか避けることばかりを考えているかもしれません。罪やさばき、地獄といった厳しいことを語るのはやめましょう、そんなことを語ってしまえば、聞いた人たちは余りよく思わないし、もしかしたら関係が難しくなってしまうかもしれませんと、私たちは真理を語ることを妥協し始めているかもしれません。果たして私たちは、キリストの働きに伴う結果を喜んで受け入れる態度を持っているのでしょうか？キリストに忠実であろうとして困難が伴ったとしても、主のためにすべてをささげることを喜びとしているのでしょうか？パウロはⅡテモテ3：12に「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」とはっきりと言っていました。私たちが主に忠実に生きていこうとすれば、当然この世は私たちのことをよくは思いません。みことばに記されていることを私たちが忠実に語って、私たちがみことばに書かれているとおりに忠実に生きていけば、世は主を忌み嫌って殺したように、私たちのことをも忌み嫌ってさまざまな迫害を受けることにもなるでしょう。でもそれでも自分は大丈夫だと言うのでしょうか？主の栄光のためであれば、どんな結果でさえ受け入れる準備はできているのでしょうか？それともキリストにあって敬虔に生きるということを妥協しているのでしょうか？もともと一番初めから、一回も敬虔に生きたいなどとは願わず、イエス・キリストを自分の主人として従っていきたくと思ったことはないのでしょうか？

もしまだ一度もイエス・キリストを自分の救い主として、主人として受け入れていないのであれば、どうかきょうこの方を受け入れてください。きょうというこの日に、私やあなたのような罪人のために、ご自身のいのちを十字架でささげてくださった、あなたを罪から救うことのできる唯一のお方に助けを求めてください。人には一度死ぬことと必ずさばきを受けることが定まっていると、聖書ははっきりと教えています。ここにいるすべての者が神の前に立つ日はやって来ます。そしてそのときに気づいても遅いのです。だからこそ今まだこの救いがあるときに、自分の罪を悔い改めて、主イエス・キリストを

自分の主として信じ受け入れてください。ただ、キリストの死と復活によるその赦しを求めてください。あり得ない犠牲を払って、みずから進んで十字架の死にまでも従ってくださった偉大なお方を、心からあなたも信じるのであれば、あなたにも救いがあると神様は約束してくださっています。ですから、この救い主を自分のものとしてください。

また、もうすでにこの主を愛して、すべてを捨てて従っておられる皆さん。私たちはキリストを信じる信仰だけではなくて、キリストのための苦しみというものも賜りました。私たちのために人々からあざけられ、十字架で苦しみ死なれたその方によって、私たちは買い取られて、キリストのからだに属するものへともう変えられたのです。これは私たちが何かをしたわけではありません。主がそれをなしてくださいました。だとすれば、そんな愛する主のために、私たちはいったいどんな働きを喜んでなしていくとしましょう？確かに働きに伴う結果は大きく、たくさんの犠牲を伴うものかもしれません。でも、そうなのであれば、私たちを救い出してくださいましたそのお方は、私たちには決して想像もできないほどの苦しみを、犠牲をもうすでに払ってくださったということをいつも覚えることです。この方にあつて、私たちは救いを見出すことができました。この方にあつて、私たちはいつも喜びを、力を見出すことができます。それならば、キリストのために忠実に働いて、それに伴う結果でさえ喜んで受け入れて生きていくことです。パウロはそのようにして歩んでいました。私たちも同じように歩むことができます。そんな彼の模範にならつて、ともに成長し続けていきましょう。